

## 死後の世界 第一部 死とは何か 第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅 ②

この学び全体のアウトラインと本日の内容

## 第一部 死とは何か

第1章 人の構造

第2章 死についての聖書的理解

第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅

## 第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

第1章 肉体の死後、人の靈魂はどこへ行くのか

第2章 復活までの中間的状态

## 第三部 死者の復活

第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】

第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】

第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】

第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

## 第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

第2章「死についての聖書的理解」では、肉体の死とは、人の非物質的部分である「靈魂」が肉体から分離することであると学びました。では、肉体を離れた靈魂はどうなるのでしょうか？ これが、第3章「非物質的部分【靈魂】の不滅」のテーマです。

前回の内容 非物質的部分【靈魂】の不滅 ①

## 1. 靈魂の不滅とは

(1) 肉体の死の後も、靈魂は無くならない（不滅）。靈魂は、永遠にそして継続的に、意識をもって存在し続ける。

(2) 聖書が「不滅」あるいは「不死」という表現をする箇所としては、Iコリ 15：53～54、「不死を着る」がある。

① これは、教会の携挙のときに地上で生きていた信者の体が、一瞬にして、栄光の体に変換されるときを指している。

② この栄光の体は、主イエスの復活の体と同じように、もはや死ぬことのできない体（ロマ 6：9）である。その意味で、「不死を着る」と表現されている。

③ よって、この箇所は、身体的な不死を教える箇所であって、靈魂の不滅についてではない。

(3) 本日の学びでは、身体的な不死ではなく、靈魂の不滅について扱う。

## 2. 聖書が靈魂の不滅を教えている箇所（17の項目）

(1) 自分の民に加えられた（創 25：8、17、35：29、49：29、33）

- (2) 自分の先祖のもとに行く (創 15 : 15、47 : 30)
- (3) エノクは死を経ることなく、天に引き上げられた (創 5 : 24)。
- (4) ヨブの自問自答、彼は霊魂の不滅と体の復活を確信していた (ヨブ 14 : 14、19 : 25~26、27)
- (5) 聖書は、体の復活があることを教えている。肉体が一度死んで、復活するまでの間に、霊魂が滅んでしまうとすれば、復活には何の意味もない。私たちの霊魂がなくならずに、意識をもって存在し続けるからこそ、からだの復活に意味がある。(イザヤ 26 : 19、ダニ 12 : 2~3、ホセア 13 : 14、ヨハネ 5 : 28~29、黙 20 : 4~6、11~15)
- (6) 肉体を離れた霊魂が意識を持っている (詩 17 : 15、詩 73 : 23~25、伝 12 : 7、ルカ 23 : 43、ヨハネ 14 : 3、Ⅱコリ 5 : 1~8、ピリ 1 : 21~24)
- (7) ダビデは、死んだ子どもがいるところへ自分も行くことになるかと語った (Ⅱサム 12 : 23)
- (8) よみ<sup>へ</sup>シエオールにいる人たちには意識がある (イザヤ 14 : 9~11、ルカ 16 : 19~31)
- (9) 人は心の中に永遠を持つ (伝道 3 : 11)
- (10) 預言者にして最後の士師であったサムエルが、サウル王の前に現れた出来事 (Ⅰサム 28 : 8~19)

今回の内容 非物質的部分【霊魂】の不滅 ②

- (11) 神は、生ける者たちの神である (マタ 22 : 29~32)
  - ① ここで「生ける者たち」とは、アブラハム、イサク、ヤコブの 3 人を特に指して言われている。彼らは身体的には死んだけれども、神は生ける者たちの神である。ということは、彼らの霊魂は生きている。
  - ② 神は、アブラハムたちと継続的に、意識的な、そして生ける関係を持っておられる。それゆえ、神は彼らのからだを死んだままには捨て置かれない。
  - ③ からだの復活はまだ先の将来のことであるが、神は今、現在、彼らと関係を持っておられる。彼らの霊魂はしっかりと意識がある。
- (12) わたしを信じる者は、死んでも生きる (ヨハネ 11 : 25)
  - ① 下線部が、「死んだが (過去形)、生きるであろう (未来形)」であれば、復活のことを指すことになるが、ここは、そうではない。
  - ② わかりやすく訳すと、「死んでいても (現在形)、生きている (現在形)」。イエスを信じる者は、死んでいても、なお生きている。肉体は死んでも、霊魂は意識をもって存在し続けている。
  - ③ 11 : 11 「わたしたちの友ラザロは眠っています」・・・「眠る」とは、信者の死について使う用語。体はちりに帰って、活動を休止していても、霊魂は意識をもって活動している状態。

- ④ 11:24 「終わりの日のよみがえりの時に、彼はよみがえる」。ちりに帰っていたからだは、不死のからだになって復活する。この箇所は、復活を指す。

死とは体と霊魂の分離、復活は再結合

(13) 神の約束「栄光をあたえる」(ロマ8:18)

- ① 18節「将来の栄光・現される・私たちのうちに」：神は、信者に将来、栄光を与えると、約束しておられる。19節では「子どもたちの現れ」という表現。
- ② 23節では、「子にさせていただくこと」＝「私たちのからだが贖われること」→ よって、18節において現される栄光とは、具体的には、23節「私たちのからだの贖われること」である。信者の復活は、「卑しいもので蔭かれ、栄光あるものによみがえらされ」(Iコリ15:43)とあるように、神の栄光を反映する不死のからだを受けることである。
- ③ 信者に対するこの約束は、肉体の死後も、信者の霊魂がなくならないで、存在し続けることを示している。

(14) 霊魂の不滅は、未来の人生を待ち望む信者のよりどころ (Iコリ15:19)

- ① 「もし私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら」＝もし、私たちに約束されているという将来の人生がないなら、「私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です」
- ② 信者がこの世での人生を神に捧げるのは、将来の栄光に満ちた人生が約束されているからである。その約束の前提となっているのが、霊魂の不滅である。
- ③ 信者がきわめて狭い道を歩み(マタ7:14)、キリストの律法に従って生きようとするのも、将来の人生があると確信するからである。それが、もし、死後のいのちもない、霊魂はなくなってしまうだけ、となったら、信者の信仰はむなしく、意味のないものである。
- ④ 霊魂の不滅は、真実である。信者が狭い道を行く生き方をしよう、神は望んでおられる。

(15) 「内なる人」は日々新たにされる (IIコリ4:16~18)

- ① 「外なる人」は衰える。私たちの肉体は、日々衰えていく。
- ② しかし、内なる人は日々新たにされている。信者は救いを受けたときに、新しい性質を受ける。その新しい性質によって、信者の内側、非物質的部分である霊魂の6要素《 霊、魂、心、思考、意志、良心 》は、日々新しくされる。
- 注意：「内なる人」には、罪の要素である「肉」は含まれない。肉は新たにされる対象ではない。
- ③ 霊魂が新しくされる理由は、それが永遠に存在するものだからである。千年王国そして永遠の秩序「新しい天と新しい地」へと、信者の将来の人生は永遠に続く。



## (16) 福音はいのちと不滅を明らかに示す (Ⅱテモ 1:10)

- ① 福音はいのちを明らかに示す・・・福音を信じると、人は、死からいのちへと移される (ヨハネ 5:24)。霊的な死の状態にあった人は、福音を信じて神との交わりを回復し、霊的に生きるものとなる。
- ② 福音は不滅を明らかに示す・・・不滅とは、人の霊魂が永遠に続くものであるということ。信者の霊魂が永遠に続くだけではない。不信者も、このまま不信仰を続けて肉体の死を迎えるなら、その霊魂は永遠に神から分離されて、永遠の死を迎えることになる。今は恵みの時、福音を信じて、死からいのちへ移ってほしい、と神は切に願っておられる (Ⅱコリ 6:1~2)

## (17) 将来の報奨とさばきがある。これは霊魂の不滅が前提である。

- ① 報奨を与えるための裁き：キリストの裁きの座 (Ⅱテモ 4:7~8、Ⅱコリ 5:10、Ⅰコリ 3:12~15)
  - 対象は、新約時代の教会の信者たち。
  - 裁きは、携挙の後、天において行われる。
  - キリストの花嫁としての教会にとって必要な「用意」(黙 19:7)でもある。このあと、天において「小羊の婚姻」(結婚式)が行われる(黙 19:7)
  - 黙示 19:9「小羊の婚宴」(披露宴)は、キリストが地上に再臨した後、地上で開かれる。千年王国の建国の祝宴は、小羊の婚宴でもある。「小羊の婚宴に招かれた者」とは、旧約時代の聖徒たちである(ルカ 13:28~29)。
- ② 諸国民のさばき (マタ 13:49~50、25:31~46、ヨエル 3:1~3)
  - 対象は、大患難期の末に、地上で生き残っている諸国民(異邦人)
  - 裁きは、キリストの再臨のあと、地上で行われる。
  - 裁きの基準：これを理解するためには、大患難期における諸国民への宣教活動について聖書の預言を知っておく必要がある。
    - 大患難期に入る前に、教会の信者たちは天に携挙されて、いったん地上には信者がいなくなる。
    - 携挙のあと、世界に散っているユダヤ人の中から、14万4千人がイエスをメシアとして認め、信者となる。彼らは大患難期前半の3年半において、世界宣教を行う(黙 7:3~8、マタ 24:14)
    - 同時にエルサレムでは二人の証人が立ってメシアを証しする(黙 11:3~12)
    - その3年半が終わると、空中から天使による福音宣教(黙 14:6~7)。
    - 大患難期に起きるさまざまな自然環境の破壊の中で、人々は明確に神の裁きであると知る。その中で、神を信じる人々と、それでも神を信じないで神を冒瀆する人々に分かれていく(黙 6:16~17、9:20~21、16:9~11)
    - 大患難期後半は、反キリストによる反ユダヤ政策が激化する。
    - 神を信じた人々は、危険をかえりみずユダヤ人たちを助ける(マタ

25 : 35~36)

- 神を信じる異邦人たちの勢力は、決して小さいものではなく、大患難期末期のハルマゲドンの戦いの中では、反キリストの首都バビロンを攻撃するほどの力を持つようになる（イザヤ 13 : 3）
- 裁きの具体的基準は、ユダヤ人たちを助けたかどうか、であるが、それは「神を信じた結果、外側に現れた行為として」である。大患難期後半において、反キリストに屈することなく、命の危険をおかしてでもユダヤ人を助けるというのは、信仰によらなければ、できることではない。

● 裁きの結果

- 信者→「御国を継ぎなさい」（マタ 25 : 34） メシアの王国に入る
- 不信者→「永遠の火に入れ」（マタ 25 : 41） 肉体の死・ハデスを経て、  
③の「大きな白い御座のさばき」、そしてゲヘナ・火の池へ

③ 大きな白い御座のさばき（黙 20 : 11~15、マタ 11 : 20~24「さばきの日」、  
ロマ 2 : 5~11「御怒りの日」「神の正しいさばきの現れる日」

- 裁きの対象は、不信者の死者たち、サタンと悪霊（黙 20 : 11、I コリ 6 : 3、マタ 25 : 41）
- 裁きは、千年王国のあと、大きな白い御座の前で行われる。この時点では、今の物質界である天地は消滅している。
- 裁きの目的は、火の池での刑罰の軽重を決める。無罪になる人はいない。
- いのちの書
  - 人が生まれたときに、その名が記される（詩 139 : 16）
  - 不信仰のまま死ぬと、その名が消される（詩 69 : 28）
  - 信者の名が消されることは決してない（黙 3 : 5）
  - 「小羊のいのちの書」（黙 13 : 8）とは別である。

3. 霊魂不滅を確信することの意義

- (1) 「今、地上で」よりも、大きな喜びが将来にあると確信できる。私たちが求めるのは、この肉体のいのちが続くことよりも、世を去ってキリストとともにいることである（ペリ 1 : 23~24）
- (2) この地上では、私たちは寄留者である、とはっきりと意識できる（ペリ 3 : 20）
- (3) 正しく生きること、聖霊の満たしを受けること、日々聖化される人生を歩むこと、これらのことを真剣に求めるようになる。同時に霊魂を新しくし、きよめるのは、神のみわざであることを信じ、神にゆだねる。自分の努力で神のみこころにかなうレベルに到達できるものではない。永遠に存在し続ける価値のある霊魂にしてくださるのは、神のみである。

神の恵みをむだに受けないようにしてください・・・

今は恵みの時、今は救いの日です。

(II コリ 6 : 1~2)